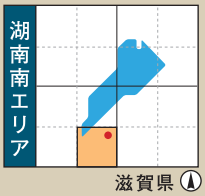
史跡
国指定

狛坂磨崖仏（こまさかまがいぶつ）

栗東市荒張　昭和19年6月26日指定



余り知る人は多くないようですが、湖南の山中には、多くの磨崖仏があります。その中でも特に優れた磨崖仏が、金勝山中に残る狛坂寺跡の磨崖仏です。造像の経緯など明らかになっていない部分も多いのですが、木立の中に佇む、ふくよかで大らかな面相の仏は、時の流れを超えて、訪れる人に安らぎを与えてくれます。

当時のできごと	
742年	紫香宮を造営する
749年	東大寺大仏完成
794年	平安京に遷都



狛坂磨崖仏

狛坂寺について

狛坂寺は、竜王山の中腹にあり、聖武天皇の勅願により建立されたとされる、金勝寺の別院として、平安時代の初期に建立されたと伝えられています。現在は、この磨崖仏の周辺に段々に造成された坊跡と石垣が残り、かつて、ここに寺院のあったことを偲ばせるのみです。

本格的な調査が行われていないため、狛坂寺に関しては、よくわからない部分が多いのですが、この周辺から、7世紀末から8世紀初頭にかけての瓦が出土しており、狛坂寺の年代を考える上で重要な資料となります。

磨崖仏について

金勝寺から続く険しい坂道を降りると、突然平坦地が広がり、北面して立つ巨岩の中に磨崖仏が陽刻されています。磨崖仏は、高さ約6.2m、幅約6mの花崗岩に上部に山形の浅い掘り込みをして、中央に台座に座る像高3.08mの如来像を本尊とし、その両脇に像高2.3mの菩薩像を、さらにその上手に三尊仏を2組と3体の菩薩立像を陽刻しています。また、三尊仏を陽刻した別石を脇に配しています。

中央の三尊仏は、格狭間（こうざま）入りの須弥壇（しゅみだん）上に配され、本尊は宣字座（せんじざ）に両足を交差させて座ります。尊名については、阿弥陀仏、弥勒仏、毘盧舎那仏など諸説があり特定されていません。本尊の面相は、大らかで微笑みを浮かべ、何か大陸的な雰囲気を漂わせています。体部は大きく、逞しく彫られ、衲衣には、平安時代初期の特徴である翻波式（ほんぱしき）の技法が見られます。

左右の菩薩像も写実的で、蓮華座に立ち、本尊と同様、微笑みを浮かべ、頭には三面宝冠を頂き腰をわずかにひねった、左右均整の姿で彫刻されています。



磨崖仏全景

現在、この磨崖仏は露座していますが、もとは堂の中に納められていた可能性もあります。

この磨崖仏が造られた年代については諸説があり明確ではないのですが、彫刻の様式から、寺の創建されたと伝えられる、平安時代初め頃とする考えが有力です。ただ、これより古く、奈良時代とする説、寺の全盛期と伝えられる、鎌倉時代頃とする説もあります。また、朝鮮半島の彫刻の技法を見ることができるとも言われています。いずれにしても、この磨崖仏の持つ、個性的で圧倒的な芸術性が揺らぐことはありません。



狛坂寺跡の石垣

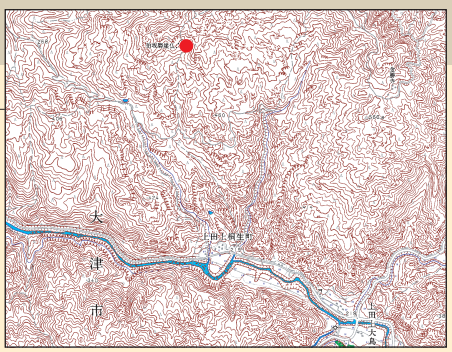
関連する文化財

金勝寺（栗東市）	湖南の山岳寺院の中心的存在。多数の文化財を有する
福林寺磨崖仏（野洲町）	室町時代後期から江戸時代にかけて造営された磨崖仏群
藤尾磨崖仏（大津市）	延応2年(1240)の銘がある磨崖仏。阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩、地蔵菩薩等を彫る
富川磨崖仏（大津市）	14世紀中頃の磨崖仏で、阿弥陀三尊を彫る。耳垂れ不動として親しまれている

もっと深く知りたい

栗東歴史民俗博物館　☎077-554-2733　栗東市小野223-8

狛坂磨崖仏へのアクセス　JR琵琶湖線　石山駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔近江の遺跡〕（財）滋賀県文化財保護協会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月